

大津 歴博 だより

第42回企画展

天台宗開宗1200年記念

天台を護る神々

—山王曼荼羅の諸相—

10月7日(土)～11月19日(日)

2006
No.64



山王本地仏曼荼羅図 滋賀・延暦寺蔵



大行事権現像 個人蔵



大津市歴史博物館

天台を護る神々

日本仏教は、神仏習合という独特の世界観を生み出し、日本文化に大きな影響を与えてきました。天台宗の場合、最澄が比叡山寺（現、延暦寺）を開創するに当たり、日吉（比叡）の神を崇め、以後日吉神（現、日吉大社）は延暦寺の守護神となります。日吉神は山王とも呼ばれ、時代とともに上七社をはじめ中七社、下七社の神々の体系が形成され、天台教学が成熟するなかで、山王神道（天台神道とも）と呼ばれる神々への解釈も生み出され、天台宗の広がりとともに、山王信仰は各地に定着していきました。

このなかで、山王信仰を表す本地仏や神像、懸仏などの美術作品も多く造られ、天台文化の一翼を担いました。特に「山王曼荼羅」と呼ばれる絵画作品は、わが国の垂迹美術を代表するものであり、様々なバリエーションのものが造られて行きました。

一方、天台の教義を充実するべく入唐を果たした円仁と円珍には、入唐を保護したという独特の神がいて、後に各寺院に祭られました。延暦寺の西に鎮座する赤山明神と園城寺北院の新羅明神です。異国の神であるこれらの護法神は、絵画や彫刻に表され、独特の風貌を持ち、こちらも山王と



山王宮曼荼羅図 東京・個人蔵



山王宮曼荼羅図 大津市坂本・個人蔵



山王本地仏曼荼羅図 大津市坂本・個人蔵



秘密社参曼荼羅図 滋賀・日吉大社蔵



『日吉神体記』 京都・三千院蔵

同じく全国に波及しました。

しかし、長い歴史の間に起こった数々の震災や争いの中で、特に元亀の法難と呼ばれる山門の焼き討ちや明治の神仏分離令などによって実に多くの文化財が失われ、その実態は過去の中に埋もれ、現在に至っていません。

本展では、こうした天台宗における神と仏の歴史を、様々な作品や資料から紹介しようとするものです。特に山王曼荼羅については、本格的に紹介する初の試みであり、新発見の作品を多数展示する予定です。

●場 所

大津市歴史博物館企画展示室A

●主 催

大津市、大津市教育委員会、大津市歴史博物館、京都新聞社、天台宗・比叡山延暦寺、日吉大社、文化庁

●後 援

KBS京都

●観覧料

一般六〇〇円、高大生五〇〇円、小中生二〇〇円

一五名以上の団体、大津市内在住の六五歳以上の方・障害者の方は二割引

●期間中の休館日

一〇月一〇日・一六日・二三日・三〇日
十一月六日・一三日



新羅明神像 滋賀・園城寺蔵



日吉山王種子曼荼羅図 兵庫・千種氏蔵

第57回ミニ企画展 大津の遺跡シリーズ5 石山国分遺跡

■平成18年9月12日(火)〜12月26日(火)

石山国分遺跡は、大津市光ヶ丘町・田辺町・国分一丁目に所在し、瀬田川の西岸、国分山から瀬田川に向かって張り出す台地上に位置しています。

この遺跡の中には、天平宝字三年（七五九）に時の最高権力者藤原仲麻呂により造営が開始された保良宮（ほりやのみや）をはじめとし、白鳳時代に創建され、弘仁十一年（八二〇）に近江国分寺となった国昌寺（くにまさのてら）、平安時代の近江国分尼寺などの重要な遺跡が含まれています。

石山国分遺跡では、これまで四次の主要な発掘調査が実施されています。特に、第三・四次調査で発見された奈良時代の遺構・遺物群は、保良宮の所在地を考える上で貴重な情報を提供しました。

今回のミニ企画展では、このような古代近江を考える上で貴重な遺跡である石山国分遺跡の資料について紹介します。

【関連講座】

九月一六日(出)

「目覚め始めた保良宮」

青山 均（本館学芸員）



石山国分遺跡 第4次調査

収蔵品紹介

51

映画館・帝国館古写真

今回収蔵品紹介でとりあげるのは、一枚の古写真です。かつて映画文化華やかなりし時代が大津にもありました。この古写真には、昭和三八年（一九六三）まで営業していた映画館・帝国館（閉館当時は有楽座）が写っています。位置は浜通りの甚七町（松本一丁目）。周辺は稲荷新地と通称され、戦前まで花街でした。今もその名残を伝える建物が、わずかではあるが残っています。

さてこの帝国館は、前身が稲荷座という芝居小屋で、明治四五年（一九一二）に竣工。小屋といっても一五〇〇人を収容する「県下第一」の劇場でした。この稲荷座が大正九年（一九二〇）頃に帝国館と改称し、ほどなく映画を始めたとい、昭和六年（一九三一）に日活直営となったのです。映画館の建物は切妻の大屋根を表通りに向けた堂々とした構造で（写真参照）、向かって右手に巨大看板、その左手に大きな高張提灯が建てられ、いずれにも上映中の「忠臣蔵」の文字が見えます。底下の横看板にも忠臣蔵の文字と俳優の似顔絵、それと配役が記されているのが分かります。名前を少し列記すると、阪東妻三郎、片岡千恵蔵、嵐寛寿郎、月形龍之介、女優では轟夕起子。いずれもオールドファンには懐かしい名前でしょうね。

この映画は天の巻と地の巻に分かれ、昭和一三年、「日本映画の父」と仰がれたマキノ省三の没後一〇周年記念として制作されました。天の巻を息子のマキノ正博、地の巻を池田富保が監督し、配役は阪妻が大石内蔵助、片岡千恵蔵が浅野内匠頭、嵐寛が脇坂淡路守でした。

また正面向かって左手の看板（掲載写真では判別不能）には「国民の誓」と記されており、これも昭和一三年、国光映画が制作したものです。だから、この写真の撮影年代は昭和一三年か、遅くとも翌一四年と推定されます。写真を寄贈していただいた白井栄さんのお話では、栄さんのお父様が、昭和一三から一七にかけて帝国館の支配人をされていたということなので、映画上映の時期と一致します。映画館の前に整列している人達の中で、前列の女の子さんが栄さんです。またその前にバス停がありますが、そこには「乗合、帝国館前、京阪バス」と記されています。湖岸道路が開通する昭和三〇年代まで、バスは浜通りの狭い道を行っていました。太平洋戦争が始まる前の、賑わいを見せたかつての大津を想起させる写真です。



帝国館

日吉山王本地仏曼荼羅図

の画像の謎解き

比叡山延暦寺の護法神である日吉社に關係深い山王曼荼羅は、風景を描く形式である宮曼荼羅、社殿の中に神仏を配置する形式である本地仏曼荼羅、垂迹(神)曼荼羅、その他「種子(梵字)曼荼羅」などの形式に分類されます。

これら山王曼荼羅の画像を読み解くには、それなりの基礎知識が必要です。それは各斎神の名前と性格やその序列、本地仏の名前と仏像の知識、そして実際の社殿の配置などです。これらの知識を駆使して曼荼羅をみると、様々な考えのもと、図像の配置が決定されていることが分かります。

今回紹介する滋賀・延暦寺本(滋賀県指定文化財)は、最も高位である釈迦如来(大宮)が中央に描かれぬという、特殊な配置を持つ本地仏曼荼羅として有名ですが、その配置にも色々と考えがあるようです。

まず、描かれている尊像の数として、上七社の七尊の本地仏と不動明王(早尾)、毘沙門天(大行事)を加えた九尊が描かれています。不動と毘沙門が下段の両サイドに配置されているのは、天台宗の堂舎などでは良く見られる形式で、いわば上七社を守護している

ようにも見えます。実際の早尾社の社殿も日吉社の入口にあり、そのことをよく表しています。

上七社をみてみると、薬師如来(二宮)を中心に置き、上部に釈迦如来、下部に地藏菩薩(十禪師)と縦に三体置き、そして向かって左の上部には普賢菩薩(三宮)、下部に十一面観音(客人)、向かって右の上部に千手観音(八王子)、下部に阿弥陀如来(聖真子)を配しています。

そこで画像の謎解きをはじめると、まず釈迦と右下の阿弥陀、左下の十一面との三点による正三角形に西本宮系本地仏を配置しています。釈迦を頂点として上部に置き、第三神の聖真子である阿弥陀を上位の左(向かって右)に、そして第五神客人の十一面を向かって左に配しています。これはまさに西本宮系斎神の序列を重視して配置しているということがわかります。

そして残りの東本宮系本地仏により、薬師を中心としたY字を構成しています。東本宮系の主神である二宮の薬師如来を中心に置き、Y字の上部には、現実の八王子山山上に所在する神である三宮の普賢と八王子社の千手を配しています。下部には上七社の中で一番入口に近い場所に所在する神であり、地の財宝を司る地藏菩薩を配置しています。

つまり、地主神である東本宮系本地仏を現

実の社殿配置に近いイメージでY字におき、外来系の西本宮系本地仏を斎神の序列重視で正三角形に配置してかけあわせ、双方の本地仏を整然とした形に当てはめているのです。

一見、日吉本来の地主神である二宮(薬師)を中心としながらも、外来神の大宮(釈迦)を最も上位に置くことで、大宮の方がやはり主神で高位であることを示しています。

山王曼荼羅は、一見分かりにくいものですが、このように斎神の内容や歴史、そして実際の社殿配置などを考慮して、バランスよく尊像を配置して描かれているのです。

(学芸員 寺島典人)

